

恋歌の表現 1 「臥す」

中川 正美

一 韻文と散文

平安仮名文では男女が契りを結ぶことを表す語に「あふ」「寝」「臥す」がある。「あふ」は二つのものが接近することをいい、反撥する場合と融合する場合とがあつて、契りを結ぶ場合は融合に当たる。「寝」は眠る行為、「臥す」は横たわる動作を基本とする。和歌の「あふ」については既にまとめ(注1)、「臥す」や「寝」についても散文では考えてきている(注2)。これら三語の分布は平安散文の展開を考えると、実に興味深い。

表1は、散文作品中の和歌と、会話と地の文、つまり散文部分での、契りを結ぶ語の現れ方をみたものである。(注3)

表1 男女が契りを結ぶ語

	あふ		寝		臥す	
	和歌	散文	和歌	散文	和歌	散文
古事記		26	16	2	1	
竹取物語	1	11				
伊勢物語	10	20	5	3		
大和物語	14	27	5	2	3	1
平中物語	22	12	1			
篁物語	1	3				1
蜻蛉日記	8		1			3
落窪物語	3	2	2	5		40
うつほ物語	23	4	4		2	20
和泉式部日記	9		4		1	3
枕草子	4		4	3		5
源氏物語	23		8			

表1の散文部分をみると、「あふ」は、上代の古事記では用字「婚」で多用されて、社会的な婚姻を意味しており(注4)、竹取物語はそれを承け、「寝」「臥す」は認められず、伊勢物語・大和物語・平中物語の歌物語では三語のうちもつばら「あふ」が用いられている。一方、蜻蛉日記などの仮名日記では兼家や敦道親王が通うようになっていたためか、「あふ」は認められない。作り物語でも落窪物語に二例、うつほ物語に四例と、ほとんど用いられていず、源氏物語になるとまったく認められない。

一方、「寝」は全般にさして認められない。古事記には二例見えるだけ、平安の物語でも、伊勢物語に三例、大和物語に二例と散見されるだけ、落窪物語の五例がすこしめだが、以降のうつほ物語や源氏物語ではまったく認められない。

ところが、「臥す」は異なる。古事記には見えず、平安時代でも初期は大和物語に一例だけだが、中期の作り物語では落窪物語に四〇例、うつほ物語に二〇例と多く。和泉式部日記に三例、枕草子に五例と散見はされる。けれども、源氏物語にはまるで認められない。

韻文ではどうか。古事記歌謡には「あふ」は認められず、男女の契りはもつばら「寝」で表現されている。中古の作中和歌では、「あふ」「寝」は全体に用いられているが、「臥す」はさして用いられていない。

傾向としてみれば、散文で男女の契りを語る際には、竹取物語や歌物語では「あふ」が用いられて「寝」は散見される程度、中期作り物語の落窪物語とうつほ物語では「臥す」が多用されており、盛期の源氏物語ではどちらも用いられない。つまり、歌物語では「あふ」、作り物語では

もっぱら「臥す」で、「寝」はいずれにもさして用いられない。男女が契る表現は「あふ」から「臥す」に代わっていく傾向が認められよう。

その一方で、作中和歌では共寝を表す「寝」は、古事記歌謡一八例中一六例、伊勢物語では六例中五例、大和物語では七例中五例と、散文より和歌に多い。ところが、落窪物語では七例中二例と三分の一にすぎない。落窪物語は散文部分に「臥す」が多用されているのだが、作中歌に「臥す」はまるで認められない。散文表現の「あふ」から「臥す」への変化はどこから来たのだろうか。和歌と関わっているのだろうか、もしくは関わりはないのだろうか。そのために、まず、和歌の「臥す」について、男女の契りに関わる表現を中心に見ていきたい。

二 上代の「臥す」「伏す」「臥ゆ」

「ふす」には「臥す」だけではなく「伏す」があるが、辞書類では「臥す」「伏す」は一括して「ふす」として記述されて、相違は問題にされない。近年の『古典基礎語辞典』（角川書店、二〇一一年一〇月）でもそれは同じで、石井裕啓氏は「ふす」項の解説で、

自動詞は四段活用で、顔や腹を下にして低い姿勢をとる意。これは、神に祈ったり、深く嘆く姿勢であるほか、死体がうつ伏せのまま安置されずに横たわっていることをいった。ただし寝るために横になることをフスという場合、必ずしもうつ伏せの姿勢かどうかかわらない。(用例省略)：類義語「ヌ」は仰向け、うつ伏せにかかわらず、身体を伸ばして横になるのが原義

と説いておられるが、どうであろうか。類義語の「こゆ」に目配りされず、「死体がうつ伏せのまま安置されずに横たわっていること」をいうと説かれるのは「伏す」に引きずられすぎているような解で、「うつ伏せ」と「安置されず」は上代から中古の用例からは肯んぜられないし、

他の辞書類にはこうした言及は認められない。「臥す」「伏す」「こゆ」について考えておく必要があるろう。

まず、「伏す」をみよう。

① かけまくも ゆゆしきかも …あかねさす 日のことごと 鹿しじも
の(鹿自物) い這ひふし(伊波比伏)つつ… (万葉・二・一九九・人麻呂)

② ひさかたの 天の原より …鹿じもの(十六自物) 膝折り伏して
(膝折伏) たわや女の 襲取り懸け … (万葉・三・三七九・大伴坂上郎女)

①の高市皇子の挽歌では、皇子の薨去を喪服を着た従者たちが悲しむ様子、殯宮に鹿のように「這ひ伏し」てといい、②の大伴坂上郎女は神を祀って恋の祈願をするのに、鹿のように「膝折り伏して」祈ったとい、山上億良は息子の病に「天つ神 仰ぎ折ひ袴み 国つ神 ふして額つき(布之互額押)」(五・九〇四)と「ふして」地に額を付けて祈ったといっており、這いつくばり、膝を折り、額づく動作を伴っている。すると、「伏す」は猪や鹿などの獣なら足を折ってうづくまり、人間なら膝を折って体を傾けて頭を下げる動作、つまり、頭を低くする、垂直方向への下方移動をいうと考えられる。

対して「臥す」には下向きの方向性はない。動植物だとわかりやすい。

③ 沖辺行き辺に行き今や妹がため我が漁れる藻臥束鮒

(万葉・四・六二五・高安王)

④ 大きな木の風に吹き倒されて、根をささげて横たはれ臥せる。

(枕草子・無徳なるもの・二三二)

③は高安王が女性に鮒を贈ったときの歌で、新編日本古典文学全集では「藻とともに詰めて生きたまま届けられた小鮒をいうか」と注し、岩波文庫(二〇一三年一月)では藻に隠れている鮒と注しているが、題詞に「裏

める鮒」とあるから藻を敷いてその上に鮒を据えたのだろう。④の枕草子では風に吹かれて大木が根を上に向けて横倒しにころがっているところ、横長のものが横たわっているさまを「臥す」というのだろう。

⑤み吉野の 小室が岳に 猪鹿臥すと(志斯布須登) 御狺せし時に：

(古事記歌謡九六・三四五)

⑤は小室の岳にふすシシを獵るといふのだから、この「ふす」は身を低くする「伏す」ではなく、寝ぐらとして住む、棲息する意の「臥す」であろう。「臥す」は地面に「立つ」ものが水平線に沿って横になる移動の意で、身体を横にする動作、またはその状態をいうのだろう。(注5)

さらに、単に横たわる意の「臥す」には「うつぶせ」「安置」の意はないようだ。「こゆ」を含めて考えるとそれがよくわかる。

「こゆ」は、上一段活用で、単独では認められず、尊敬の「す」が付いた「こやす」や、「ふす」「まるぶ」を後項とする「こいふす」「こいまろぶ」の複合語の形で認められる。

⑥「即ちその水門の蒲黄を取り、敷き散らしてその上にこいまろべ(輓転)ば…」 (古事記上・七八)

⑦しなてる 片岡山に 飯に飢てこやせる(許夜勢履)その田人あはれ

(日本書紀歌謡一〇四・五六八)

⑥は大穴牟遲神が赤裸の白うさぎに、真水で身体を洗って、河口の蒲の花を採って敷き詰め、その上に横たわって転がれば必ず治るだろうと教えており、「こいまろぶ」はごろごろ展転反側することをいう。⑦も推古二一年一二月に聖徳太子が片岡で、飢えて道ばたに倒れている農民に衣服と食物を与えて詠んだ歌だから、この「臥やす」は倒れているだけで、亡くなっているわけではない。

ただ、万葉集では「臥す」も「こゆ」も亡骸に対して用いられている。

⑧玉梓の 道に出で立ち…しき波の寄する浜辺に 高山を 隔てに置

きて 浦淵を 枕にまきて うらもなく ふしたる君(倭為公)は：

(万葉・一三・三三三九・調使首)

⑨家にあらば妹が手まかむ草枕旅に臥やせる(臥有)この旅人あはれ

(万葉・三・四一五・聖徳太子)

いずれも題詞からは行路死人で、⑧の備後神島浜は「ふす」、⑨の龍田山は「こやす」だが、誰ともしれぬ亡骸がころがっている、という状況に変わりはない。⑨の「こやす」は「こゆ」の敬語で死の敬避表現、⑧も「ふしたる君」といつているので、死者を敬うという点は同じだろう。

万葉集で亡骸をいうのは「ふす」三例と「こやす」五例だが、行路死人がうつ伏せかどうかはわからない。「こやす」五例のうち行路死人は三例で、四二一番と七九四番の二例は石田王と旅人の妻の挽歌だから、彼らはきちんと葬送され、安置されている。殯宮に安置されたり野辺送りされた亡骸がうつ伏せとは考えられない。「こやす」に亡骸放置やうつ伏せの意はないと考えてよいだろう。

しかも、万葉集には「こゆ」と「ふす」が複合した「こいふす」五例が認められる。類義の複合語とするには落ち着きがよくない。一例は恋に苦しみ、四例は病に苦しむ例で、いずれも苦痛に関わるから、「臥い伏す」と考えた方がよいのではないか。また、平安仮名文の散文部分には、「うつぶしふす」が竹取物語に一例、平中物語に一例、落窪物語に三例、源氏物語に三例、紫式部日記に一例と、五作品に九例認められるから、「うつぶしふす」は「うつぶし臥す」と考えられよう。「ふす」は、うつ伏せの意の「伏す」と、「立つ」に対して横たわる意の「臥す」とに分けて考えた方がよいのではないか。

「ふす」と「こゆ」の違いはよくわからない。万葉集では「こゆ」は人間にしか認められないが、古事記の⑥は白うさぎである。大国主と会話しているの、猪や鹿のような獲物としてではなく、神話時代の、人

と共に生きる、一種の擬人化された生きものと考えられなくもない。とすれば、「こゆ」は同じ横たわる動作状態でも、意図的な動作と考えられるのかも知れない。

三 万葉集の「臥す」「臥ゆ」表現

述べたように上代には「臥す」だけではなく類義の「臥ゆ」が認められる。そこで「臥す」に「臥ゆ」を含めて、横たわる意を基底とするこの二語が、万葉集でどのような事態を表現しているかを考究していこう。なお、用例数には左注中の歌は含めない。

前稿『『臥す』人々―日常の文学的形象―』（『梅花女子大学文化表現学部紀要』一七号、二〇二〇年三月）で、平安仮名散文の「臥す」を、A就寝・B病臥・C横臥・D情交・E常時の五つに分類したが、本稿では「寝」と対照するため、Dの「情交」を「共臥し」に改めたい。

①ある人のあな心など思ふらむ秋の長夜を寝覚め臥す(寤臥)のみ

(万葉・一〇・二三〇二)

②夕されば小倉の山に臥す(臥)鹿し今夜は鳴かず寐ねにけらしも

(万葉・九・一六六四・雄略)

①②は眠るため床につく動作やその状態を表す「A就寝」である。①は秋の相聞の、夜に寄せる歌で、西本願寺本では「寤師耳」だが、諸注釈書では元暦校本に従って「寤臥耳」と改めている。上の句で世間の人の秋の長夜に対する感覚を推測し、下の句では自身の感覚を表出する構成で、私以外の人は、今この時、「あな心な」と長夜でも短いと思っているのだらう、それに対して私は目が覚めて眠れず、夜が明けるまで「臥す」、ただ横たわっているだけ。世間の人は愛する人と夜を過ごして満ち足りているのに、私は独りだけで過ごす、この夜の長さがたまらなくつらいのだといっている。これは独り臥しを嘆く歌である。

②で「臥す」のは鹿である。小倉山に棲息する鹿は季節がら毎夜毎夜妻問いの声を挙げていたのだろう。ところが今夜はその呼び声が聞こえない。それで雄略帝は「寐ねにけらしも」、無事相手が見つかって共寝しているのだと推察する。季節感と安堵が相俟った歌である。ために拾遺集にも採られたのだろう。前章③では「鮒」を「臥す」と詠んでいるが、万葉集にはこのように鹿や猪などの動物が「臥す」と、景として呈示する「臥す」歌が多い。これについては後述する。

③大君の 任けのまにまに：うちなびき 床に臥い伏し(等許尔許伊布之) 痛けくし： (万葉・一七・三九六一・家持)

③は越中で激務に倒れ、死に瀕した家持の歌である。「床に臥い伏し」というのだから常とは異なり、寢床にうつ伏し、腹這いになる痛みが日ごと増さっていったという。これは病臥である。病臥四例はすべて「臥い伏す」の形で認められ、「臥す」単独で、病を表現する例は万葉集には見えない。なお、題詞五例と左注三例の「臥」はすべて病臥である。

④飛ぶ鳥の 明日香の川の …なにかも 我が大君の 立たせば

玉藻のころ 臥やせば 川藻のごとく(立 玉藻之母許呂 臥者

川藻之如久) 靡かひし 宜しき君が 朝宮を 忘れたまふや： (万葉・二・一九六・人麻呂)

⑤玉藻よし 讃岐の国は：波の音の 繁き浜辺を 敷栲の 枕になして 荒床に ころ臥す君が(自伏君之) 家知らば 行きても告げむ

： (万葉・二・二二〇・人麻呂)

⑥かけまくも あやに恐し：ひさかたの 天知らしぬれ こいまるひ(展転) ひづち泣けども： (万葉・三・四七五・家持)

④⑤⑥は横臥である。④は天智天皇第四皇女、明日香皇女の挽歌で、生前のなやかな麗姿を、お立ちになった時を「立つ」、横になられた時を「臥やす」と対句にして表している。

⑤は人麻呂が讃岐国狭岑の島の浜辺で独り倒れている屍、横臥死体を「臥す」と詠んでいる。三三三六番でも「うらもなく 臥したる(所宿)人は 母父に 愛子にかあらむ 若草の 妻かありけむ」と、誰にも知られず旅先で亡くなったあわれを詠んでいる。こうした行路死人を悼む歌は前章で述べたように「臥す」三例、「臥やす」三例が認められるが、「臥やす」は行路死人だけではなく、葬送された亡骸にも用いている。「臥す」はすべて海辺だが、「臥やす」は坂にも海辺にも用いているのでなんともいえない。ただ、人麻呂は香具山で、河辺宮人は松原で屍を詠んでいるが、「こやす」「臥す」は用いていない。

⑥は安積皇子の挽歌で、舍人たちが皇子の死を嘆くさまを「臥いまるび」嘆くと、転び回るさまを叙して皇子を悼んでいる。水江の浦の島子が常世から現世に帰ってきて、あまりの変わりように動揺して櫛笥の笥を開けたと詠む時と同じで、禁じられた笥を開けると白雲が出、常世の方にたなびいたので、「立ち走り 叫び袖振り こいまるび(返側) 足摺しつ つ たちまちに心消失せぬ」(九・一七四〇)と、呼び返そうと叫んで袖を振り、転げ回り足摺をすると詠んで、強い悲嘆を描出している。「C横臥」では、「臥す」「臥やす」で単に横たわる意を、そして横たわった亡骸を、「臥いまるぶ」で悲嘆を表しているのである。

⑦やすみしし わが大君：昼はも 日のことごと 夜はも 夜のことごと 臥し居嘆けど 飽き足らぬかも

(万葉・二・二〇四・置始東人)

⑦は弓削皇子の挽歌で、昼は一日中、夜は一晩中「臥し居嘆く」というように、「臥し」に対義語「居」を組み合わせて、横たわっても坐っても、「E常時」を表している。

こうした万葉集の「臥す」「臥ゆ」表現は、「A就寝」は一一例で、そのうち独り臥しが二例、動物が九例、「B病臥」は四例、「C横臥」は一

五例で、そのうち亡骸が八例、悲嘆が六例、「D共臥し」は認められず、「E常時」は一例用いられている。

四 万葉集「臥す」の恋歌

意外なのは、万葉集には男女が結ばれるDの共臥しが認められないことである。そんななかで、恋はどのように表現されているのだろうか。「臥す」「臥ゆ」を用いた恋歌をみてみよう。

⑧むし衾なごやが下に臥せれども(雖臥) 妹とし寝ねば(不宿者) 肌し寒しも (万葉・四・五二四・藤原麻呂)

⑨臥いまるび(展伝) 恋ひは死ぬともいちしろく色には出でじ朝顔が花 (万葉・一〇・二二七四)

⑧は藤原麻呂が大伴坂上郎女に贈った歌で、カラムシの柔らかな夜具をかけて床についているけれど、あなたと共寝していませんので肌寒いと、独り臥しを嘆いて、恋情を訴えている。前二首からは久しくあつていなかったらしい。前章①と同じく独り臥しの歌だが、①の自嘲とは違って相手に直接訴えている。⑨の「臥いまるぶ」は前章で転げ回って悲嘆する表現と述べたが、この歌でも、身もだえして恋死することになっても、朝顔の花のようにはつきりと顔には出すまい、あなたへの想いを秘めたまま恋死にしようだと訴えて、相手の心を溶かそうとする、テクニクの歌である。

また、万葉集には鹿や猪の動物、鮒が「臥す」とする歌が九首も認められる。鮒は二章の③で取りあげたように贈り物として見栄えよく藻に横たわらせて包んだ、人の手が加わった状態だが、鹿や猪はそれらが住み処として横たわる場所や動きを取りあげている。

⑩吉隠の猪養の山に伏す鹿(伏鹿)の妻呼ぶ声を聞くが羨しさ

(万葉・八・一五六一・大伴坂上郎女)

⑩は前章の②と同じく鹿の妻問いを素材にしているが、②が牡鹿の立場になって恋の成就を寿いでいるのに対して、この歌では羨ましいという。郎女は跡見の田庄に独りなのだろう。私には問うてくれる人もいないと嘆いているのである。

⑪さ牡鹿の朝ふす(伏)小野の草若み隠らひかねて人に知らゆな

(万葉・一〇・二二六七)

⑫さ牡鹿の小野の草ふし(草伏)いちしろく我が問はなくに人の知れらく
く

(万葉・一〇・二二六八)

⑬さ牡鹿のふすや(布須也)草むら見えずとも子ろが金門よ行かくしえしも

(万葉・一四・三五三〇)

⑭紫草を草と別く別くふす鹿(伏鹿)の野は異にして心は同じ

(万葉・二一・三〇九九)

この四首は牡鹿が草むらをすみかとして潜む習性を利用して、自分の恋を詠んでいる。⑪はその草が「若」いため丈が低くて隠れかねるといふ句と、人に知られるなという結句の連接がわかりにくい、自分への戒めなら秘めた恋心、相手への戒めなら二人の関係を世間に知られるな、用心が肝心といっている。⑫の「草ふし」は草の押された跡で鹿が臥していたことがはっきりわかることで、まだ妻問いもしていないのに、世間ではもう我が想いが知られている、契つてもいないのに恋が現れてしまったという。この二首は鹿の習性に寄せて自身の恋を詠んでおり、鹿と恋する自分とは分けているのだが、逆に⑬は鹿を恋する娘に喩えている。鹿が草むらに臥すと姿は見えない、そのように恋するあの子は家の中にいて姿を見ることなどできない、それでも私はあの子の門の前を通る、それだけでもうれしいのだと、恋する人の姿は見えなくても家の門まで行かずにはいられないという、恋する者の心理を描出している。

⑭は、鹿は紫草を足で分けて別扱いする、私も鹿と同じように、紫草、

つまり愛する人を大切にするというのだが、新全集では紫草を傷めないように取りのけて残った草の上に臥すとし、岩波文庫では特に紫草を選んで集め、その上に臥すとする。すると、愛する人を傷つけないように配慮するか、平凡な女ではなく、すてきな愛する人とだけ共臥すると誓うかだが、これは鹿の実際の習性がどうなのかにかかってこよう。

⑮江林に臥せる猪やも(次宋也物) 求むるによき 白栲の袖巻き上

げて獸(宋)待つ我が背 (万葉・七・二一九二)

⑯安達太良の嶺に伏すししの(祢尔布須思之能)ありつつも我は至らむ寝処な去りそね (万葉・一四・三四二八)

この二首は猪で、旋頭歌の⑮は、猪を捉えようと腕まくりして待っている男に、腕自慢でもそう簡単に捕まらないわといっているのだが、「我が背」と呼びかけているので、揶揄だとはわかる。相聞だから猪は女の喩で、私は簡単に捕まらないわよと表明しているのか、あるいは他の女をねらっても難しいわよと牽制しているのか。⑯は陸奥の東歌。猪はねぐらを替えない習性を持つので、猪がずっとそこにいるように、私は変わらず通つていこう。だから寝床を変えないでくれ、心変わりせず、私を信じて待ち続けてくれと願っている。

このように万葉集の「臥す」「臥やす」を用いた恋歌は、A就寝の用法で、独り臥しの嘆きと、鹿や猪の知悉している動物が「臥す」さまを形象化し、それを人間の恋心と関連付けて詠んでいるといえよう。

三 勅撰集の「臥す」表現

万葉集の「臥す」を用いた恋歌は、「臥す」表現のうちのA就寝を用いるのがもっぱらだと述べた。では、平安時代の歌はどうであろうか。

平安時代、竹取物語から源氏物語までが作られた時期の歌で編まれた勅撰集は、古今集から後拾遺集までだから、この四集で調べると、「臥す」

表2 和歌の「臥す」表現

	A		B	C			D	E	
	就寝	独り臥し	動物植物	横臥	亡骸	悲嘆	思案煩悶	共臥し	
万葉集		2	9	4	1	8	6		1
古今集	1				1				2
後撰集	2	3						1	
拾遺集	2	1	1	1	2				1
後拾遺集	2		6						1

は古今集に四例、後撰集に六例、拾遺集に八例、後拾遺集に八例と、合わせて二六例で、総歌数は万葉集四五一五首に対して五〇九四首だから現れ方は万葉集の「臥ゆ」を含めた三一例に比すと多くはない。

これらを万葉集に做って分類してみると表2のようになった。(注6) A就寝のうち、「独り臥し」は後撰集に三例、拾遺集に一例、B病臥は拾遺集に一例認められるが、これは二⑦の書紀歌謡の引用だから平安の歌とはいえない。Cの横臥でも亡骸や悲嘆は見えない。「思案煩悶」は万葉集に認められず、勅撰集にも拾遺集に一例だけだが、散文部分には多用されている。横臥して思案煩悶するのは散文表現だったのだろう。D共臥しは万葉集には認められなかったが、勅撰集でも、古今集や後撰集には見られず、拾遺集になって一例見え、後拾遺集にも一例見えるだけで、多いとはいえない。

では、勅撰集には、万葉集からの変化が窺われるのだろうか。

① 夏の夜の臥すかとすれば時鳥鳴く一声に明くるしのめ
(古今・夏・一五六・貫之)

② 臥すからにまづぞわ
びしき時鳥鳴きも果
てぬに明くる夜なれ
ば(後撰・夏・一八一)

③ 鹿の音ぞ寝覚めの床
に通ふなる小野の草
臥し露や置くらむ
(後拾・秋上・二二)

家経

④ 秋風に折れじとすまふ女郎花いくたび野辺に起き臥しぬらん
(後拾・秋上・三二三・前律師慶暹)

いずれもA就寝だが、万葉集とは違っている。①は寛平御時后宮歌合の歌で、夏の夜は横になろうかと思ったら、時鳥の鳴くひと声で夜が明けていき、もうしのめになったよといい、②は横になるやいなや、まずつらいと思う。時鳥が鳴き終わりもしないのに明けてしまう短夜だからというのだが、これは貫之の①に対して、ひと声どころじゃない、そのひと声が終わらないうちに明けてしまうからゆったり眠ることもできず、鳴き声を堪能することもできない。だからつらいのだと反論している。これらは短夜を景物の時鳥と取り合わせた、季節を生きる感覚を「臥す」行為で人事と取り合わせた点が新しい。

③④で「臥す」のは鹿や女郎花で、新たに植物が取りあげられている。

③は祐子内親王家歌合の歌で、万葉以来の牡鹿の妻問いと草臥しが詠み込まれ、聴覚から露の置く小野の景に想いを馳せており、④は秋風に吹かれて揺れ動く女郎花を擬人化して男の懇請や心変わりにあらがう女性の姿を彷彿とさせている。これらは四季歌だが、①の「臥すかとすれば」「しのめ」、②の「臥すからにまづぞわびしき」③の「寝覚めの床」から、高田祐彦氏が説かれたように(注7)、恋の気分を漂わせている。

⑤ 臥して寝る夢路にだにもあはぬ身はなほあさましき現とぞ思ふ
(後撰・恋二・六二〇・紀長谷雄)

⑥ 秋の田のかりそめ臥しもしてけるがいたづらい寝を何に積ままし
(後撰・恋四・八四五・藤原成国)

⑦ いづこにも身をば離れぬ影しあれば臥す床ごとに独りやは寝る
(後撰・雑三・一二二八)

⑧ いかなりし時呉竹の一夜だにいたづら臥しを苦しといふらむ
(拾遺・恋三・八〇四)

⑤から⑧は独り臥しである。⑤は長谷雄が女に贈った歌で、夢路でさえあうことができないとは我ながら興ざめな現実を痛感していますと訴えているのだが、「臥して寝る」と、「臥す」と共に「寝」が用いられている。この組み合わせは「現には臥せど寝られず」（後撰九二五）など以後多く見られるようになるが、「寝」と共にみえる「臥す」は常にA就寝の意である。⑥の詞書は「人の許にまかりて侍るに、呼び入れねば、簀子に臥し明かして遣はしける」だから、訪れたのに女が部屋に入れてくれないので、簀子で心溶けるよう訴え続けたが、その努力も実らず、簀子で横になって一夜を過ごすことになってしまい、明け方に詠み入れたとおぼしい。秋の田を刈り取って稲を稲置に積みあげる景を描出し、「秋」に「飽き」を響かせ、「刈り」に「仮」、「稲」に「い寝」を掛けて、あなたに飽きられて簀子に「仮初め臥し」をしたが、むなし眠りなどどうして重ねられましょうか、あなたの心を取り戻したいのですと願っている。⑦は女友だから「定めたる妻もはべらず、独り臥しをのみす」とからかわれて、私には身を離れぬ影がありますからね、どの寢床でも独りじゃありませんよと言り返した、機知的な応酬である。⑧はいったいいつ一夜だけの「いたづら臥し」を苦しいなどと口にしたのだらう、今はずっと独り臥しなのに、と過去の思い上がりを省み、現況を嘆いている。独り臥しは万葉以来、このように恋の嘆きを詠む状況として用いられてきた、それがあって⑦のような趣向が生きているのである。

⑨ほの見ても目馴れにけりと聞くからに臥し返りこそしまほしけれ
（後撰・恋四・八五七）

⑨はC横臥の煩悶である。この歌は男に贈られた後朝の「蜻蛉のほめきつれば夕暮れの夢かとのみぞ身をたどりける」（八五六）という、はかない一瞬のような逢瀬でしたから夕暮れにするうたた寝の夢かと、今ずっと記憶を反芻しておりますと逢瀬の感動を詠んできた歌への返歌で、

新大系の片桐氏は「ほの見ても目馴れにけり」を男のことばの引用と解されて結句を「死なまほしけれ」とされたが、工藤重矩氏が『後撰和歌集』（和泉書院、一九九二年九月）で、男以外の言葉として訳出されているのに従い、一種の慣用表現と解したい。女は、あなたは私を見たとおっしゃいますが、世間ではほのかにただけでも見馴れて飽きてしまうと言いますから、おあいしてしまつた今は寝返りをして顔を隠してしまいたいと後悔していますと切り返している。だってあなたに許した今は、飽きられないかと恐れるばかりなのですものと媚態で応えたのである。

⑩梓弓思はずにして入りにしをさもねたく引き留めてぞ臥すばかりける
（拾遺・雑下・五六八・源景明）

⑩秋霧は立ち隠せども萩原に鹿臥しけりと今朝見つるかな
（後拾・雑二・九一三・兵衛内侍）

⑩⑪はD共臥しである。⑩は詞書で「女の許にまかりたりけるに、とく入りにければ、朝に」と、求愛のために訪れたのに、女はさつさと廂から奥に入ってしまったので、簀子に取り残された影明は、期待を裏切られ、むげにうち捨てられた想いを、弓を引くようにあなたを引き留めて共臥しすべきだった、私が馬鹿だったと詠み贈ったのである。⑪は平行親がひそかに別の女に通っていないながら抗弁したので詠み贈った歌で、行親を鹿に喩え、「秋」に「飽き」、「鹿」に「しか」を掛けて、私に飽いた気持を秋霧に隠しても今朝、萩原に鹿が「臥」すように、他の女の許で共「臥し」していたと見てしまいましたよ、と浮気の現場を押さえて詰っている。鹿の「臥し」は就寝、行親の「臥し」は共臥しとなる。

このように、勅撰集では病臥や横臥の亡骸表現こそ認められないが、就寝の「臥す」を用いて、独り臥しは共臥しできぬ嘆きを、動植物では、習性を形象化して恋の趣きを醸成したり、「虎臥す野辺に身をも投げてむ」（拾遺・一二二七・国用）「鳴の臥す刈田に立てる稻茎のいなとは人

のいはずもあらなむ」(後拾・六三二・顕季)のように片恋の苦悩を訴えており、大部分が恋にかかわって用いられているといつてよいだろう。

五 作中歌の「臥す」表現

表1では平安仮名文の作中歌の共臥しだけを示した。もちろん仮名文にはA B C Eの「臥す」も認められる。作中歌の「臥す」は大和物語に四例、平中物語に一例、蜻蛉日記に一例、うつほ物語に一三例、和泉式部日記に一例見えるが、伊勢物語・落窪物語・源氏物語には見えない。散文部分に共臥しがめだつ落窪物語とうつほ物語では、作中歌はまったく逆である。散文部分に共臥しが四〇例見える落窪物語では、和歌には「臥す」が全く見えない。それに対して散文に共臥しが二〇例見えるうつほ物語では、「臥す」歌が一三首見える。それらは、A就寝が一〇首でそのうち七例が独り臥し、C横臥は一首で悲嘆、D共臥しは二首で、興味深いのは独り臥しである。

①菅原やふしみの里を忘るるは我が荒れまくや惜しまざるらむ

(忠こそ⑨二一九)

②荒れまくは君をぞ惜しむ菅原やふしみの里のあまたなければ

(忠こそ⑨二一九)

忠こそ巻には「臥す」歌が集中して見える。それは忠こそその父、橘千蔭が妻亡き後、洪々ながら一条北の方の懸想を受け容れて婚姻したことに発する。亡妻に心を残す千蔭は心ならずも一条殿へ通うが、夜離れがちになっていく。待ちあぐんだ北の方が千蔭に贈ったのが①で、「伏見」と「臥し身」を掛けて、私が独り臥ししている伏見の里をお忘れになって訪ねて下さらないのは、お越しにならないと荒れてしまう我が家をも惜しんで下さらないのでしょうかと訴える。それに対して千蔭は②で、私が訪ねず荒れ果てた邸におられるのはお気の毒です。でも私には他に共

臥しする伏見の里など多くはありませんよと返している。千蔭は①の独り臥しを嘆く一条北の方の歌に、②で「臥し」を共臥しに替えて宥めたのである。そして、今夜だけと思つて訪れるが、北の方に向き合うと、もう気が重くなり、二三日も逗留すると堪えがたく、「内裏より召しあり」と急いで出る。帰邸すると気持ちも安らぎ、亡妻の御帳台に臥して、

③年ふれど忘れぬ人の寝し床ぞ独り臥すにもうれしかりける

(忠こそ⑥二二二)

と、独り臥しは嘆くものだが、私はむしろ「うれしい」と喜んでい

通常、独り臥しは恋する者には耐え難いものである。作中でも、

④山彦も応えぬ空に鳴く鶴は天の河原に独り臥すかな

(春日詣⑥二七九)

⑤独りのみ我が臥す宿のとこ夏は常にをり憂きものにぞありける

(祭の使⑫四七五)

④⑤はあて宮への求婚歌で、④の兵部宮は自身を鶴に擬し、あなたの返歌さえいただけで泣いている私は、「天の河原」である宮中にただ独りで臥しているのですと訴え、⑤の春宮は常夏の花に添えて、独りだけで床に横たわる私は、この常夏の花を手折るのも気が進まないように、独りの床は居づらくてもこの憂いのです、と訴えている。

男女の仲でなくても、独り臥しは肌寒くつらいと考えられていて、

⑥露けくて山辺に独り臥す人の夜の衣に脱ぎかへよとぞ

(国譲下⑫三〇八)

⑦松風の寒きまにまに年を経て独り臥すらむ君をこそ思へ

(国譲下⑫三二六)

⑥は仲忠が、あて宮の入内で傷心し、世を捨て山に籠っている仲頼に法服や夜着を贈る時の歌、⑦はその仲頼が、涼から贈られた粥の料を小野に隠棲している妻に贈る時の歌で、「露けくて」「松風の寒き」と独り臥

しは肌寒いものだからと理由づけて贈っているが、それは男女の共臥しなら暖かいとする共通観念が形成されているからである。⑥⑦はその通念を利用した気づかいの歌なのである。

すると、③の独り臥しを「うれし」という千蔭がいかに特異であるかわかる。もちろん、千蔭の独詠は亡き妻と共臥ししていると思つての「うれし」にほかならない。こうした亡妻を忘れかね、新たな妻を愛しかねる父千蔭の婚姻が忠こそその悲劇となつていき、「臥す」歌はその発端を伏線として底流させていくともいえよう。

⑧臥しまろび唐紅に泣き流す涙の川にたぎる胸の火(あて宮④一二二)これはあて宮入内の日、悲しみで人事不省に陥つた同腹の仲純が対面を懇請し、小さく丸めてあて宮の懐に投げ入れた歌である。「臥しまろび」は万葉集にも見える展転反側の悲嘆を表す語で、「唐紅」「涙の川」「たぎる胸の火」と、激烈なことをばを連ねて、血の涙が川となりそれが燃えたぎる胸の火であぶられてたぎるさまを描出し、私がこうした尋常ならざる悲しみに陥っているのは、あなたが私を顧みず入内するからです、と訴え、投げ入れるや悶絶してしまう。この「臥す」歌もまた、あて宮をめぐる恋を表す一環を形成しているのである。

共臥しはどうかというと、仲忠が帝の召しに応じず藤壺に隠れた時、⑨百敷を今は何ともせぬ人の誰と蓬の宿に臥すらむ(尚侍②二二三)父兼雅に捜し出され渡された⑨では、帝が遅参はそなたに隠れた愛人がいるためかとからかい、早急に参れと命じている。②も忠こそが私には愛人などいけませんと弁明しているから、共臥しの感激を歌ってはいない。

大和物語でも「君と臥す間のなきぞわびしき」(八八段三一一)「ひと夜ふた夜のあだの臥しをば」(九〇段三二四)「かりそめに君がふし見し」(一一〇八段三三四)と、共臥しできないと嘆いたり、実のない浮気にすぎないとなじっている。共臥し歌もまた、嘆きの表現なのである。

このように、平安の「臥す」歌は、基本的には恋に関わつて詠まれ、共臥しできない嘆きを表すもので、勅撰集と同じく作中歌でも、実のない共臥しを嘆くか、独り臥しのつらさをさまさまに訴えるかしている。これは平安和歌の性格によるもので、散文との違いにほかならない。報われない愛の種々相が語られるうつほ物語では「臥す」歌が要所に見えるが、男と女の愛が形成されていき信じ合う過程を語る落窪物語では、散文の「臥す」こそ必要な表現で、「臥す」歌はそうでなかったのだろう。

注

〈1〉拙論「万葉集の『あふ』『あはず』歌」(「梅花短大國語国文」一九九二年九月)「古今集の『あふ』『あはず』歌」(「梅花短大國語国文」一九九三年一〇月)、注〈4〉

〈2〉『臥す』の文学史―源氏物語以前―(「梅花女子大学文化表現学部紀要」第一六号、二〇一九年三月)『臥す』人々―日常の文学的形象―(「梅花女子大学文化表現学部紀要」第一七号、二〇二〇年三月)

〈3〉古今集・後撰集・拾遺集・後拾遺集は新編国歌大観、その他は新編日本古典文学全集を用いた。引用文も同じ。私に表記などを変えたところがある。引用文には括弧中に、作品名・巻名や段数・頁数を示した。

〈4〉拙論「古事記の『婚』―男女の関係表現から―」(「梅花女子大学文化表現学部紀要」第一三三二〇一七年三月)

〈5〉注〈2〉

〈6〉後拾遺集には就寝と共臥しが掛けられている例があるので、実数より一例多い。

〈7〉高田祐彦氏『古今和歌集』(角川ソフィア文庫二〇〇九年六月)